

# 上尾歴史散歩

262

## ◆ 上尾市域の紅花商人 ◆

### 古文書にみる宿場と村の生活 10

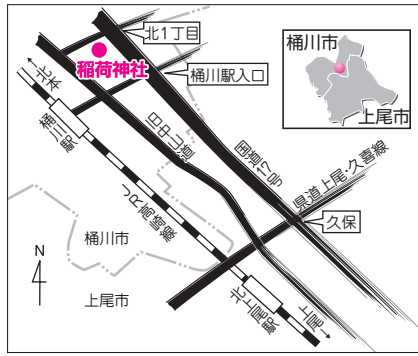
江戸時代の紅花の栽培や取引の資料は、全国的には山形県、京都府に数多く残存し、次いで埼玉県に大量に遺されている。埼玉県の紅花資料は、上尾市域に遺されているものが中心で、他の市町村の残存資料は微々たるものである。江戸時代には埼玉県域の各地で紅花が栽培されているが、残存資料は大変偏っていることになる(『武州の紅花』)。

上尾市域に遺されている紅花資料は、南村名主須田治兵衛家と分家の久保村須田大八郎家のもので中心で、本家の治兵衛家は約六百九十点、分家が約四百点である。その他中分村芝の矢部半右衛門家、同村袋の矢部善兵衛家、地頭方村島田家などにも、貴重な資料が遺されている。矢部善兵衛家と島田家には、紅花の栽培資料があり、類例が少ないうえに大変珍しい(前掲書『須田康子家文書目録1近世編』)。



紅花商人の名が記されている石灯笼(稻荷神社)

紅花は秋蒔で、春蒔で遅く開花する山形産に比して早く生産されており、京都の間屋も高値で買い上げたため、栽培は武州各地に急速に広がることになる。武州産の紅花は、京都では「早場」「早庭」とも通称され、安政五(一八五八)年の相場表を見ると、山形産が一駄五十一〜六十兩の価格なのに、早場の極上は八十兩という高値である。新興の武州産が高値で取引されたことは、収穫期が一カ月ほど早いだけでなく、武州農民が品質的にも工夫を凝らして栽培をしていた結果ということになる(前掲書)。



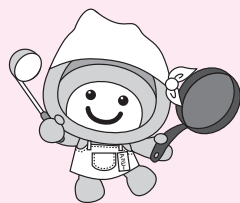
紅花問屋伊勢屋理右衛門は、享和元(一八〇二)年に須田治兵衛宛に百十五兩余の仕切書を出している。この例では、須田治兵衛が早くから紅花取引に参加していたことを証することになる。須田大八郎家では、天保十(一八三九)年からの近在村々からの紅花仕入帳が遺されており、これまた早くから紅花取引を実施していた例となる。桶川市の稲荷社には、安政四(一八五七)年に近在の紅花商人が寄進した石灯笼がある。そこには多くの紅花商人の名が記されており、上尾市域では須田治兵衛、須田大八郎の他に、中分村矢部半右衛門、藤波村篠田金右衛門、荒沢村菅原源蔵の名がみられる(前掲書)。

(元埼玉県立博物館長・黒須茂)



### アッピーを探そう!

お料理アッピー(右のイラスト)が登場するのは2ページ



**【賞品】** 正解者の中から抽選で5人に、粗品を差し上げます。  
**【応募方法】** はがきかメールにクイズの答え、住所、氏名、年齢、電話番号、『広報あげお』の感想を記入して、1月21日(月)まで(必着)に上尾市広報課「わくわくクイズ係」へ。

あて先: 〒362-8501本町3-1-1  
 メールアドレス: s55000@city.ageo.lg.jp  
**【発表】** 賞品の発送をもって発表に代えさせていただきます。 ※正解は2月号のこのコーナーで。前号の答えは「ぐるっとくん」でした。ご応募ありがとうございました(応募者49人)。

### 市の人口・世帯

(平成24年12月1日現在)

22万7,496人

男/11万3,478人

女/11万4,018人

※前月より19人減。

9万4,059世帯